

会 議 記 録 (概要)

会 議 名	令和5年度 教育長・教育委員と生涯学習審議会委員との意見交換会
日 時	令和5年8月3日(木) 10時30分から12時00分
場 所	三田市役所 南分館6階 601会議室AB
出 席 者	(教育委員会) 鹿嶽教育長、中上委員、中野委員、三木委員 (生涯学習審議会) 田中委員、別惣委員、門垣委員、尾上委員、清山委員 加藤委員、篠木委員、建部委員
事 務 局 等	【学校教育部】 浅野部長 (教育総務課) 靱井係長、田中 (学校教育課) 田中課長、増野指導主事 【子ども・未来部】 (健やか育成課) 神影課長、北山係長 【地域共創部】 印藤部長、横溝市民協働室長 (文化スポーツ課) 下山課長、堀係長、上野

会議概要

1 開会

2 教育長あいさつ

3 各委員自己紹介

4 意見交換会

テーマ『地域とともにある学校づくり
～法に基づくコミュニティ・スクールについて～』

●三田市における取組報告

「学校教育課」、「健やか育成課」の取り組み状況について報告

●テーマについて意見交換

教 育 長：三田市では、平成20年より社会教育・生涯学習事業を市長部局へ移管し、教育委員会は学校教育に特化した体制を執っている。県教育委員会からは、社会教育・生涯学習の所管を変えたことにより、学校教育との連携が図りづらいのでは、というお声をいただくこともあるが、報告にもあったように連携は上手く図れていると考えている。

尾上委員：以前、市民からコミュニティ・スクールでの協議回数が少ないという声を聞いたことがあるが、各学校でのコミュニティ・スクールの協議会の平均実施回数はどれくらいか。また、協議会は校長が招集して行っているものなのか。

事 務 局：年間実施回数は、3回から4回実施している。また今年からコミュニティ・スクールは新体制となったため、今後回数を重ねていく過程で、各学校での年間実施回数は変化していくものと思われる。なお、協議会の招集は校長が

行い、委員の任命は教育委員会で行っている。

田中委員：さまざまな取り組みを実施しておられることと思うが、開催の拠点は基本的にどこになるのか。

事務局：放課後子ども教室においては、開催地が固定されているわけではないが、地域住民を対象に行っているため、地域のコミュニティハウスや集会所で行われることが多い。こうみん未来塾においては、学校向けのプログラムは学校で行われることが多く、多くの参加者が集まる講座の際には、市民センター等の市内公共施設を使用するが多い。

加藤委員：自身は県立高校の学校評議員を務めているが、小中学校では、学校評議員の仕組みはなくなったのか。

事務局：現在、新しいコミュニティ・スクールとして活動しているため、小中学校に学校評議員の仕組みはない。

田中委員：昨今、学校教員の業務負担が注目されているが、今回の取組は地域住民の協力を得て、教員の業務負担の軽減を図ろうとするものなのか。コミュニティ・スクールにおいては、教員にとっても、地域住民にとっても相互の利益となっていることが重要である。

教育長：学校や教職員の負担については、おっしゃる通り全国的な問題である。コミュニティ・スクールを推進し、学校と地域の一体化をより強固にし、地域住民の生涯学習や生きがいづくりの点と教職員の負担軽減の点を結び付け、学校と地域の相互利益の関係を構築したいと考えている。

田中委員：自身も小学校の校長を務めた経験があり、当時は、子どもが家に帰るまでが学校の責任という風に言われていたため、教職員の負担が大きかった。現在は地域住民のボランティアにより、教職員の負担が軽減され、また、ボランティア行為自体が地域住民の生涯学習や生きがいづくりにつながっているように感じる。三田市ではボランティアの方々も気持ちよく学校運営に参画していただけていることと思う。

尾上委員：ボランティアは学校やその組織自体にとって一番の理解者であり、一種のファンでもあると思う。学校でもボランティアの数を増やすことで、時間軸だけではない教職員の実質的な働き方改革へつながると考える。

田中委員：STEAM教育に関する発言が報告では見受けられなかったが、取り組み状況はどうか。

教育長：授業は教室型ばかりではなくなってきており、今の子どもたちには、先生から教えられるだけでなく、自身で課題を見つけ、他者と対話しながら答えを導き出す力が備わってきているように感じる。こうみん未来塾では、STEAM教育を根底においたプログラムも組まれているため、子どもたちが学校だけでは学べないさまざまな体験をすることができ良い刺激になっていると感じる。三田は、多種多様な地域人材に恵まれており、自身の経験やスキルを子どもたちへ伝えようとする機運が高まっているように感じる。

田中委員：市民の方々のタレントを行政がコーディネートしていく必要がある。

中野委員：学校教育において、まずはじめに子どもたちは地域との関わり方について学ぶ必要がある。総合的な学習を進めるには、学校の中だけではできないことはたくさんある。学校長は画一的に教育を進めるのではなく、地域との連携

を図り、学校の実態を地域住民と共有する機会をもつべきである。学校と地域とのつながりを強固にすることで、子どもを中心に考えた、学校づくり、地域づくりにつながると考える。地域と学校が両輪の体制で教育を進めていくためにも、今後のコミュニティ・スクールのあり方は非常に重要である。

門垣委員：三田市のヤングケアラーの実態はどうなっているか。

教 育 長：首長部局にて行われた生活実態調査の中では、三田市にもヤングケアラーの存在は確認できた。

門垣委員：地域コミュニティが希薄化する昨今では、地域住民が子どもたちの実態を十分に認知できていないように感じる。貧困や、家庭環境等により、教育機会の多くを諦めてしまっている子どもたちを支える仕組みを学校と地域とで構築すべきである。

中野委員：そのためには、学校側が子どもたちの実態を十分に把握したうえで、地域住民と協力し、子どもたちを子ども食堂等の地域コミュニティに溶け込ませていく努力が必要である。

建部委員：地域の中で、さまざまな取り組みがある一方、住民のボランティアに頼っている部分が多く、持続可能な体制を整えるためにも、ボランティアに対して多少の謝礼を用意しても良いのではと感じた。また、こうみん未来塾ではさまざまな講座を展開されているが、参加者はリピーターばかりではなく、普段学校に来られていないような子どもたちも参加できるようになっているのか。

事 務 局：こうみん未来塾では、学校の協力を得て、全市版については講座のチラシを毎回子どもたちへ配布していただいている。市広報誌でも講座の周知が徹底できるよう努めている。

清山委員：こうみん未来塾は、講座によって開催場所が異なるため、保護者の送迎が困難な子どもたちは参加しづらいのが実態である。一方、放課後子ども教室は、地域住民を中心に放課後の各学校で催されることが多いため、そのような子どもでも参加しやすい環境を整えている。子どもの貧困や複雑な家庭環境に最初に気が付きやすいのは担任教師である。教師が子どもを注意深く観察し、必要に応じて福祉と連携し子どもの支えとなっていけるよう細心の注意を払っている。

田中委員：教育を進めるうえで、活動の実態だけではなく、子どもたちの成長過程を分析し、OECD21世紀型スキルにも掲載されているとおり、子どもたちがこれからの社会を生きていくうえで必要な能力を習得していけるような事業展開と持続可能な体制の構築を期待する。

加藤委員：小中学校の統廃合が進む中で、子どもたちや住民にとっては地元の学校がなくなっていくような感覚があると思うが、今後の地域と学校のあり方についてはどのように考えているか。

教 育 長：小中学校の統廃合については反対の意見をいただくことも多いが、地域の範囲が広まり、1つの新しい学校が出来上がるわけで、決して地域から学校がなくなるわけではない。そこにまた新しいコミュニティができる。子どもたちのより良い教育環境の整備のためにも必要である。

5 閉会